

令和6年度研究主題

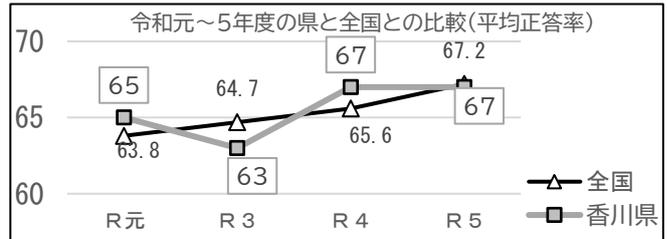
学ぶ意味を子供が実感する国語科の授業づくり（3年次）

－付けたい力を身に付けさせるために、自己を見つめることを促す－

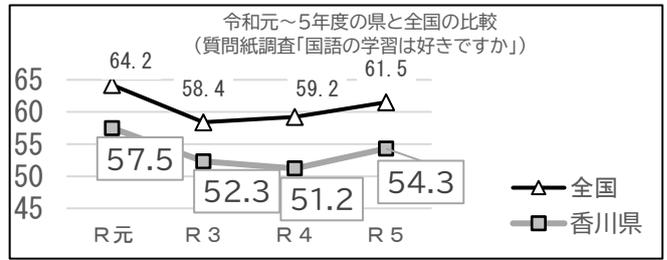
1. 研究主題について

(1) 香川県の子供たちの状況から

これまでの本県の全国学力・学習状況調査の結果は右図の通りである。令和5年度に実施された全国学力・学習状況調査の小学校国語についての正答率は、67%（全国67.2%）であった。昨年度と比べ全国平均との差が縮まり、同等の結果であったが、各校で進められてきた研究を通して、一定の成果が出ていることが伺える。



また、質問紙調査における「国語の学習は好きですか」という項目における本県の肯定的な回答の割合は右図の通りである。香小研国語部会として課題に挙げてきた「国語の勉強は好きですか」という質問項目について、本年度の肯定的回答の割合は令和4年度の調査と比較すると3.1ポイント増加しており、このことから、これまでの国語部会員の先生方を中心とした日々の取組の成果が伺える。



しかし、その割合は依然として高くはない。この「国語を好きではない」と感じている子供たちに、「国語っておもしろい」「国語を学びたい」と意欲を高めさせることができれば、より主体的・対話的で深い学びを進め、国語科の資質・能力を育てることができると考える。

そのためには、これまでの成果を活かし、引き続き国語を学ぶおもしろさや楽しさを感じさせながら、自らの成長を実感し、国語を学ぶ意味を子供自身が感じられるような授業づくりを行っていくことが重要であると考えます。

(2) これまでの研究の成果から

本部会では一昨年度より、研究主題を「学ぶ意味を子供が実感する国語科の授業づくり」とし、研究を進めてきた。その間、県内の各校で子供たちが、おもしろい・楽しいと感じながら国語科の資質・能力を育み、国語の学習を好きになっていくような取組が進められてきた。このような各支部での先生方の実践を通して、子供たちが学ぶ意味を実感するための授業作りのポイントとして、以下の点が重要であることが明らかになってきた。

- ・子供たちに付けたい力を明確にすること。また、それを子供たちとも共有すること。
- ・課題を設定する場面において、本時の学習や課題解決の意欲を高めさせること。
- ・課題を解決する場面において、より納得できる考えをもたせること。
- ・課題解決後の場面において、自身の取り組み方やその成果に気付かせること。

また、夏季研修会では、大塚健太郎教科調査官から「教師自身がどのような資質・能力を育成するのかを明確にもち、子供たちが楽しみながら国語を学ぶことができるような授業改善の必要性」「目の前の子供たちの状況を把握するとともに、指導事項の系統性を理解しながら単元を組むことの重要性」

「主体的な学びを実現するための教師の評価の在り方及び、子供自身が学習を改善していけるような評価（振り返り）の在り方」などについて、具体的な実践を踏まえながらご講演いただき、本研究をさらに前に進めていくためのご示唆をいただいた。

夏季研修会での研究主題に関するアンケートでは、「指導要領に示された内容と香川県の実態から、国語科教育の課題解決に向けた方針が明確に示されたテーマになっている」「学ぶ意味を実感する子供の育成を目指すことで自律した学習者につながると感じる」「子供に学ぶ意義を実感させるための支援を工夫し、意識して取り入れて授業改善をしたい」といった前向きな意見もいただいた。そこで本年度も研究主題を継続し、研究を深めていきたい。

（３）学ぶ意味を実感する

「学ぶ意味を子供が実感する」姿とは、子供が、その単元で身に付けたい力を意識しながら、話すこと、聞くこと、書くこと、読むことなどの学習活動に主体的に取り組み、友達と協働しながら、課題の解決に向かっていくとともに、解決後には、付けたい力が身に付いてきたと感じたり、当該単元で身に付いた力を、新たな問題の解決に生かしたりしながら、国語の学習のおもしろさや楽しさ、大切さを実感していく姿である。子供たちが国語を学ぶおもしろさ、楽しさ、大切さを実感していくような授業ができれば、それは、同時に子供たちが本当に解決したい課題が位置付き、国語科の見方・考え方を働かせながら解決に向かい、その過程で必要感をもった対話が行われ、自分が納得した考えをもてるようになるはずであり、国語科で目指すべき資質・能力を育成することができるだろうと仮定し、一昨年度より研究主題を新たに設定したのである。

2. 研究副主題について

（１）付けたい力の定着に向けて

国語科の授業を通して一番大切なことは、国語科の資質・能力を育成することである。そのために、これまでの研究でも付けたい力を明確にすることを大切にしてきた。本研究でも、学習指導要領に示されている「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」を基に、付けたい力を意識することは継続して大切にしていく。その際、付けたい力を教師が意識するだけでなく、子供たちとも付けたい力を共有しておくことが重要である。これから学習していく際に、どのような力を付けるために学習しているのか、どんなことができるようになればいいのかという具体的なイメージをもたせ、学習を進めていくことで、学ぶ意味を子供が実感することに繋がると考える。

（２）自己を見つめる

これまでも振り返り等で、学びの成果を実感させたり、次に取り組みたいことを共有したりして自己の学びを見つめ、次の学びに向かう意欲を育ててきた。一方で、形だけの振り返りとなっていて、自分自身でしっかりと自分の学びについて見つめることができていない子供もいたという課題があった。そのよ

うな子供と、しっかりと自分の学習を振り返ることができていた子供の差が、学習意欲の差にもつながっているのではないかと考える。

「自己を見つめる」とは、自分の考えや学習への取り組み方を自分自身で振り返ることである。言うなれば、メタ認知を働かせることである。メタ認知とは、「自分で自分の心の働きを監視し、制御すること（広辞苑第六版）」である。本研究において、授業の中で、メタ認知を働かせるとは、自身の思考活動等を客観視し、状態を把握することである。そして、把握した自身の思考活動等を必要に応じて修正することであると捉える。メタ認知は、中教審答申において、資質・能力の「学びに向かう力・人間性等」に属するものとされている。このことは、メタ認知が学習意欲と関連があることを示唆するものである。また、学習指導要領総則編には、以下のようなことが述べられている。

児童一人一人がよりよい社会や幸福な人生を切り拓いていくためには、主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等が必要となる。これらは、自分の思考や行動を客観的に把握し認識する、いわゆる「メタ認知」に関わる力を含むものである。 「小学校学習指導要領解説 総則編」, 2017, 38 頁

学習指導要領でも述べられているように、メタ認知を働かせることは、予測困難な社会において、様々な問題に直面した際、主体的に課題設定し、自力で、または他者と協働することを通して解決していくために、必要な能力の一つだと言えるだろう。メタ認知を働かせることができれば、自分が行っている活動を客観視することができ、目標に照らして軌道修正を行いつつ、目標達成に向けて進んでいくことが可能となる。そして、その過程を繰り返すことにより、子供たちは、より大きな目標である、自分の人生における目標の達成や自己実現に向けて、自律的に生き、社会の中で他者とよりよい関係を築きながら、成長していくようになるだろう。

3. 授業づくりの視点

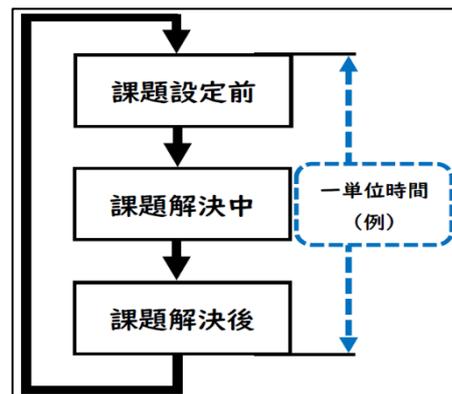
これまでの研究で、その単元における重点指導事項を基に、付けたい力を明確にすることや、付けたい力に合った言語活動を充実させること、また、関心を高めたり、自信をもたせたりする支援をすることの重要性は明らかとなっている。そこで、これらのことは授業を考える際の前提として研究を進める。

また、自己を見つめさせる支援を考える際に、日頃の観察や質問紙調査等から、現時点でどの程度、自己を見つめることができているかや、付けたい力についての実態を捉えておくことが重要となる。子供たちの実態を把握した上で、その子供たちに応じた支援を考えていきたい。

(1) 授業を三つの場面に分ける

本研究では、一単位時間をいくつかの場面に分けて考えることで、自己を見つめさせる支援を考えやすいと仮定して、便宜上、三つの場面に分けることとする。小学校の授業では、一つの課題解決に向かう中で、いくつかの学習活動が行われることが多いだろう。自己調整学習の理論を参考にすると、課題に取り組む際の段階として、予見段階→遂行段階→自己省察段階といった表現が用いられている。ここでは、それを小学校教員にとって分かりやすい課題解決を基準に下図のように表してみる。

この流れを、国語科における課題解決に当てはめてみる。まず、課題設定前においては、学習計画や既習事項等を基に、課題が適切かどうか、自分が解決したい問いになっているか確認した上で、課題を設定する。次に、課題解決中は、「別の考えもあるのか」と新たな考え方を獲得したり、「今の考え方であっているか、まだ気付いていない文や言葉はないかな」や「自分の考えはこれでよいか、もう一回よく見直そう」と自分の課題への取り組み方を確かめたり、自分の考えを再考したりする。そのように自己を見つめたことを基に、「今の方法で続けて考えていこう」や「友達に相談すれば、もつとたくさんの文や言葉に気付けるかもしれないな」などと、より自分の考えを納得できるものにするために解決方法を是認したり、修正したりしていく。課題解決後は「解決できたか」を判断したり、「できるようになったことは何か」「どうして納得できる考えを作ることができたのか」などを確かめたりすると共に、次に取り組むべき課題を見いだして、設定しようとするのである。



【授業における3つの場面（深谷，2016を参考に作成）】

（2）各場面の目的に応じた支援を考える

この三つの場面には、それぞれ自己を見つめさせることでねらう以下のような目的があることが明らかになってきた。

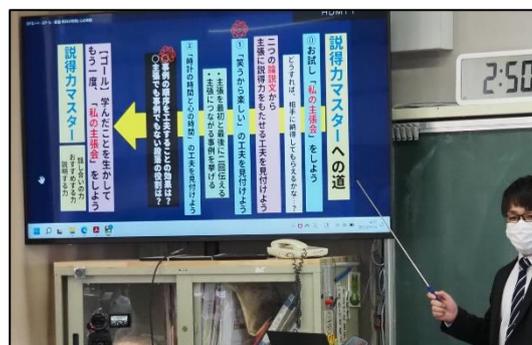
- ① 課題設定前…本時の学習や課題解決の意欲を高めさせる。
- ② 課題解決中…より納得できる考えをもたせる。
- ③ 課題解決後…自身の取り組み方やその成果に気付かせる。

① 課題設定前「本時の学習や課題解決の意欲を高めさせる」ために

課題設定前の場面においては、自身が納得した課題を設定できるように支援することを大切にしたい。そのためには、本時の学習課題についての自己の考えを見つめさせる支援を行うことで、子供たちに本時の課題に取り組む意味や価値を感じさせ、課題解決への意欲を高めさせることが必要である。そのための支援としては、自分たちの学習の目的を全体で共有するとともに、これまでの学習の進捗や現在地を確認させることが有効であることが分かってきた。

以下に『笑うから楽しい』『時計の時間と心の時間』（光村図書6年）を用いた実践を紹介する。

本単元では、共通のテーマについての自分の主張をそれぞれが伝え合う「私の主張会」をすることを言語活動として設定した。単元の導入で子供たちと一緒に作った学習計画と単元のゴール、そして、そのためにどのような力を付けることが必要かを補助黒板に位置付けた。それを基に、授業の最初に本時の学習課題を設定し、その理由を確認する場を設定した。そうすることで、「前時は事例の順序の工夫が分かったから、今日は新しい工夫を見付けてについて考えて自分の主張に生かしたい」や



【学習計画や単元のゴール，付けたい力を共有】

「相手に納得してもらえように主張する力を付けたい」など、本時の学習課題を解決することが、ゴールや付けたい力とつながっていることを感じている様相が見られた。この学習計画については、学年の発達段階に応じて、大まかなものであったり、子供とともに一緒に作ったりすることも考えられる。

また、これまでの学習の成果を想起させることも課題解決の価値を感じさせる有効な支援である。

第2学年の「話す・聞く」領域の実践では、学級会でする遊びを紹介するために、自分のおすすめの遊びの魅力を紹介する「遊びの魅力紹介大会」をすることを言語活動として設定した。本実践の導入では子供たちと一緒に作った学習計画と単元のゴールを確認した後、これまでに活用したワークシートなどを位置付けた図を示し、これまでの学習でどのようなことができるようになったか成功体験を想起させた。そうすることで、「今日、自分たちの遊びの魅力を紹介する順序について考えることで、紹介がもっとよくなりそうだ」など、本時の学習課題を解決することで、単元のゴールに近付くという課題解決の意味や価値を感じている様相が見られた。



【これまでの学習の足跡を示した図】

② 課題解決中「より納得できる考えをもたせる」

課題を解決している場面においては、より納得できる自分の考えをもたせることを大切にしたい。そのためには本時の課題に対する自己の考えを見つめさせる支援を行うことで、より納得できる考えに向けて再考させることなどが必要である。自分と友達との考えの共通点や相違点を捉えやすくし、何度も考え直したくなるような学習活動・教具を工夫することが考えられる。

以下に、「書く」領域の『あそび方をせつ明しよう』（東京書籍2年）を用いた実践例を挙げる。

本単元では、生活科の時間に自分が作ったおもちゃの遊び方を、「おもちゃまつり」で一年生に伝えるための説明文を書くという言語活動を設定した。本時は、「遊び方が正しく伝わるか確かめよう」という学習課題を設定し、自分がこれまでに作ってきた説明で、遊び方が伝わるか互いに話し合った。その際には、まず、遊び方が上手く伝わらない教師のモデルを提示し、どこを確認すればよいかを全体で共通理解した。そして、説明文を読みながら、実際に友達に遊んでもらう場を設定した。



【実際に友達に遊んでもらい、自分の説明を見直す】

それにより、客観的に自分の説明が相手に伝わるものになっているか、説明の言葉やまとめ、その順序について見つめ直すことができた。その中で、自分の書いた説明文を修正したり、言葉を付け足したりして、自分の説明をよりよいものにしようと見つめ直す様相が見られた。

また、教科書や新聞記事を読んで学んだことを基に、自分の伝えたいことが伝わるような新聞記事を実際に作った5年生の実践では、自分か書いた新聞記事を班で見せ合った後、互いの伝えなかったことを予想し合う時間を設けた。そして、書き手は何を伝えなかったかを見せ合い、直した方がいいことや良かったところを伝え合う時間を設けた。自分が伝えたいことがうまく読み手に伝わらなかったことに気付いたり、読んだ班の友達からアドバイスをもらったりしたことで、自分の伝えたいことが明確に伝わるような写真や見出しの言葉等を選び直している姿が見られた。



【友達と互いの記事を見合い、要素を見直す】

③ 課題解決後「自身の取り組み方や、その成果を捉えさせる」

課題解決後の場面において学ぶ意味を実感させるためには、自分の成長や頑張りを見つめさせる支援を行うことで、自身の学習への取り組み方や、その成果を捉えさせることが必要である。前教科調査官の菊池英慈氏は、振り返りの意義について次のように述べている。

一般に、学習の振り返りという行為は、学習者自身が学習の節目節目において、学習した内容や活動を想起し、理解したことを整理する学習活動です。そのためには、児童に單元ごとの中でどのような資質・能力を身に付けるか、学習の見通しがもてるようにすることが大切です。

何が分かって、何が分からないのかなどを表現させ、自分自身の学びを自覚させていきましょう。分からないことがあれば調べたり、次の時間に確認したりするようになり、更に成長する機会となります。さらに、振り返りによって、「自分の考えを発言できた」、「次は友達の意見を聞きたい」といった学んだことの充実感、達成感を味わうことになり、それは学習への意欲とつながっていきます。

「資質・能力を育成する小学校国語科授業づくりと学習評価」, 明治図書, 2021, 43 頁

このように振り返りを行うことで、自身の理解したことを整理し、学びを自覚させ、学習する意味を感じさせることができるのである。しかし、ただ振り返りの時間をとるだけでは、自身の学びを見つめさせることにはつながらないことは、大塚健太郎教科調査官も講演の中で言及されていた通りである。効果的に自身の成長や頑張りを見つめさせるためには、「何を」「いつ」「どのように」振り返らせるのかについて工夫することが必要であると考えます。

以下に、ア～ウの項立てに即して課題解決後における効果的な支援を考える際のポイントを述べる。

ア 「何を」振り返らせるのか

一言に「振り返り」と言っても、「今日の学習を振り返りましょう」と教師が伝えただけでは、子供たちは、何を振り返ればいいのか混乱するであろう。自身の学習への取り組み方や、その成果をとらえるためには、どのような自分の姿を見つめさせるのかを教師が明確にしておく必要がある。そして、何を振り返らせるかを想定した後、子供がどのような振り返りを書くことを目指すのかを教師が想定し、実際に書いてみることも単元構成や授業づくりの上で大切であろう。

これまでの実践から明らかになってきた効果的な振り返らせる内容を以下に示す。

- a 自分が学習してきた結果や、自己の学びの変容を分析する振り返り
- b 学びの過程（プロセス）を分析する振り返り
- c 次の学習に向けての振り返り

a は、教科の資質・能力としての高まりを捉えさせる観点である。本時の学習を通して分かったことや自身の考えの深まり、また、子供と共有した身に付けたい力について、どのように自身の力が単元前後で高まったかなどについて振り返らせることで、子供が自らの成長を正確に捉えることができるだろう。

b は、自身の学習への取り組み方を捉えさせる観点である。学習への取り組み方とは学習方略全般のことである。例えば「今日は友達と考えを交流したことで、新しい考えを見付けることができた」「一つだけでなく、いろいろな観点から想像したから、がまくんの様子がもっと詳しく想像できた」などのように、課題解決できた理由を考えさせるなどすることによって、自身の取り組み方のよさに気付かせることができるだろう。

c は、捉えた自身の成長や頑張りを基に、次にどんな学習をしたいかを見つめさせる観点である。本時の学習の成果が次時以降の学習につながっていることに気付くことで、本時学習したことの価値をさらに感じることができるだろう。また、新たに必要だと感じた学習を追加したり、もう少し本時の学習に時間をかけたいと感じたりすることで、学習計画を見つめ直し、修正することも起こりえるだろう。

振り返りを行う際、上手くいかなかったと感じている子供に対しても、どうしてそう思ったのか理由を考えさせ、次回の取り組み方の目標を教師と共に立てることで、本時の取り組みを前向きに捉えられるようにすることも大切にしたい。

以上の理由から、課題解決後の場面では、上述した三つの視点についての振り返りを促していきたい。

イ 「いつ」振り返らせるのか

国語科の特質として、各領域の指導事項に沿って学習過程が進んでいくことが挙げられる。例えば「書く」単元の領域では、重点指導事項が「ウ：考えの形成」であっても、そのために「ア：題材の設定、情報の収集、内容の検討」が行われ、集めた材料を基に「イ：構成の検討」を行い、「ウ：考えの形成、記述」をしていこう。その後、「エ：推敲」を行い、互いに紹介を聞き合い「オ：共有」することも考えられる。その中には、「知識及び技能」の習得をしていたり、「学びに向かう力、人間性」を発揮したりしている時間もあるはずである。そのように単元が進んでいく中で、必ずしも毎時間、授業の最後に同じような観点で振り返りを行うことが適当でない場合も考えられる。本時のねらいに即して、イで述べた三つの視点のうち、何についての自己評価を促すのか教師が明確にもち、適切な時間に配置し、単元をつくっていききたい。

ウ 「どのように」振り返らせるのか

アで述べた視点について、効果的に振り返る方法は、領域や指導事項の特性、教材の特徴、子供たちの発達段階や言語活動、本時の学習活動などによって多様にあると考える。

例えば、「話し手が伝えたいこと」の中心を捉えるための手段としてメモを活用し、話の組み立て方を意識して、必要なことを記録しながら聞く力の育成をねらった3年生の取り組みでは、単元導入時に自分の力だけでメモをする活動を設定し、単元の最後にとったメモと比較するという方法で本単元での自分の成長を振り返らせた。学習前後の具体的なメモを比較させることで自身の変容を視覚的に捉えることができ、付けたい力について、自分の成長を明確に感じている様相が見られた。



【学習前後のメモを比較し、成長を実感】

このように、単元や、本時の学習の特徴に合わせて効果的な振り返りの方法を考えていくことで、より自身の学びの成果や頑張りを見つめさせることができるのである。

4. 今年度の研究の重点

三つの場面において、それぞれの目的を達成させるための自己を見つめさせる支援を工夫することで、子供たちが本時の学習課題に対して「解決したい・チャレンジしたい」と感じたり、納得する考えに向け、「友達の考えも聞いてみたい」「もう少し考えたい」と粘り強く取り組んだり、「今日の学習では、〇〇ができた」「次は〇〇を頑張りたい」と自分の頑張りに気付いたりさせ、国語科を学ぶ意味を子供に感じさせることができたという成果が見られた。

また、振り返り場面では、単元のどの場面で、どのようなことについて振り返らせるのかを工夫することが、より学ぶ意味を感じさせるために効果的であることが、新たに明らかになってきた。そこで今年度は引き続き、様々な領域や発達段階において、効果的な自己を見つめさせる支援の在り方を探るとともに、単元の中で、「いつ」「何を」「どのように」振り返り、自己の頑張りや成果を見つめさせるか、その効果的な支援についても意識しつつ、研究を積み上げていきたい。

令和6年度研究の重点

- 付けたい力を育成するために、各場面における目的を達成するための自己を見つめさせる支援を行った具体的な実践をさらに探る。
- 学ぶ意味を子供がより感じられるように、学習を通しての自身の成長や頑張りを見つめさせるための効果的な振り返りの支援の在り方を探る。